言葉を軸に世界をとらえる

中山春樹

はじめに

オノマトペ（擬音語・擬態語）を軸として文化の違いや面白さを見つけ、第三者（読んでる皆さん）の異文化理解のきっかけを作るプロジェクトを始めた。オノマトペはその国のイメージや言葉の感覚を反映するものであり、世界のオノマトペを研究することに価値があるのではないかと思ったからだ。また、辞書や google 翻訳を使っても答えを得ることができず、現地に行った者のみが答えを知れる面白さもある。この研究は分類的には言語学に属されるが明確な答えや調査の方法がないため研究の手順や準備に苦労した。中学校で擬音語・擬態語・擬声語など日本語には５つの音の表現を習うが、その区別は明確に定められてはなく曖昧であるように、世界のオノマトペを考える上で、そもそも「オノマトペの定義とは何か」、というファーストステップから躓いてしまった。

事前調査の段階で難航したうえコロナウイルスの影響で全くインタビューができず、本来の計画とは全く異なってしまった。しかし「考え方の違いを肌で感じる」「他の学生がやらないようなことをやり、他人の機会を造る」というこれらの想いと目標を軸として調査内容を急遽変更し、違う角度からではあるが多くの発見をすることができた。

私の目的として既に記したように、このレポートを読み少しでも外国への興味が湧いたり、新しい考えを提供することができれば自分の目標達成となり、この研究は大いに価値があったと思います。

＊コロナウイルスの為に急遽帰国することになり調査内容が変更となりました。まず今回の研究のテーマでもあるオノマトペについて、そのあとは目的に基づいた現地の文化、歴史、言語について触れたいと思います。またコロナウイルスという脅威の元で、ヨーロッパで過ごし、その中で学んだ貴重な経験も共有したいと思います。
＊オノマトペについて集められたデータが少ない為、調査の手順などは省略します。

くしゃみに音をつけるのは日本だけ？

まず今回のメインテーマである擬音語・擬態語ですが、私は「くしゃみ」に対してどのような音をつけるかを調査するつもりであったが、コロナウイルスの影響で不謹慎な話題となってしまいました。全くデータを集めることができませんでしたが、事前調査を含め、わかった事をレポートします。

現地でわかったこと

中国人は「achi」（アチ）韓国人「aee chee」（アーチィ）ギリシアなどバルカンの人々は「acho」（アチュ）と表現し、データが少ないものの、どこの国もアチェという音に似た表現をしていた。逆に言うと「ハクション」などと音をつける国は日本だけであった。

なぜ日本だけ独特な表現をするのか？

それは日本語は物事を詳細に表現する習慣がある（表現のレパートリーが多い）からではないかと考える。雨が降っている時は、「ザーザー雨が降っている」、「ポツポツ雨が降っている」「チラチラ雨が降っている」などと、とても詳細に豊かな表現を日常的に使っている。つまり、表現豊かということである。オノマトペでいうと「カァカァ」、「クスクス」、「シーン」、「どかーん」、など限定的で本当にレパートリー豊かな表現がある。

それではなぜ表現豊なのか、一つはマンガの影響があると思う、海外でも日本の漫画は非常に人気であるが、戦いのシーンに使われるオノマトペ「ドカーン」「ブーーン」などは英語だとそのまま「doka---n」「 Booooom」などと記されていることがある。これは英語でこれに当たる表現がないということかもしれない。逆に言うとそれだけたくさんの表現があるのだ。

しかしマンガの誕生は近代である、これよりもっと前から日本人は表現豊かであったに違いない。そこで私は、日本人が表現豊かであることは、古くから親しまれる古典作品などと関連があるのではないかと思った。

日本の歴史を映す古文作品では景色、季節、時間帯、心の状態、天気などの状況を事細かく記している。「美しい」という単語にしても古典表現のレパートリーが非常に多いことがわかる。古文だけでなく俳句や詩、短歌など日本にはたくさんの風靡な娯楽があることから分かるように、いかに景色や気持ちを表現豊かに詳細に繊細に伝えるかに人々は知恵を絞っていました。現代でもそのように詳細に表現する必要があり、出来事を色々な言い回しで表現するということが現代でも生き、たくさんのオノマトペが使われているのだと考えた。

オノマトペから見えるもの

この豊かに表現する力が日本人のアイデンティティとなったのではないかとも考えることができる。日本人の多くに見られる「相手の心を繊細に読み取る」、「相手を思いやる」、「おもてなしをする」、という繊細な情感覚は、表現力の豊かさと強く関連性があるのではないかと考えた。さらに、お花見のように季節の景色を見て楽しむことや、生花のような風靡な娯楽が日本に根付いていることも日本人が古くから表現豊かであることが少なからず影響しているだろう。逆に日本の伝統が表現力豊かで繊細ということを前提として見ると、確かに納得できる部分も多くあると思った。

オノマトペを軸として日本（日本人）とはどんな国（人）かを考えると、何か繋がる部分がたくさんあることがわかり、普通とは違う視点で日本を捉えることができた。オノマトペという正解がなく、掴み所のないようなテーマだが、よく考えてみると、すごく深いものであり、私たちが普段から息をするように使っているものであるからこそ、私たちを表しているものでもあることがわかった。

中国人から学んだ、中華英語は存在するのか？

わざわざ言及するほどでもないが、日本では驚くほどたくさんの英語が日常的に使われている。「ワイシャツ」、「タオル」、「パソコン」など日常的に浸透しているものもあれば、最近では「ファシリテーター」や「ディスカッション」など比較的難し目の言葉も使われている。アルバイトなど仕事の現場では、「コミットメント」、「エンカウンター」など違和感を覚えるほど、英語が日本語を侵食しているように感じることもある。日本で暮らしている限り、和製英語があるのは普通と思っていたが、私がセルビアで出会った中国人の女性と話すうちに、中華英語が少ないという興味深い事実を発見した。これは当たり前のことかもしれないが、文化を知るのにちょうどいいツールとなると思った。ここで中華英語とは、中国で使われる外国語の単語のことを表しています。このことが、単なる自分の思い込みではないことを確かめる為、英語などそのままでしか表現できない様なものを中国ではどのように表現するか聞いてみた。以下の表は外国語の表現、日本の表現、中国の表現をまとめたものである。

英語など外国語の表現	日本での表現	中国での表現
Alcohol	アルコール	酒精
Beer	ビール	啤酒
Wine	ワイン	葡萄酒
Spaghetti	スパゲッティ	意大利面
Television	テレビ	□ □

Cardboard	段ボール	□□
Personal Computer	パソコン	□□□□

外国語の表現、日本の表現、中国の表現まとめ

中華英語が少ないことは何を意味するか？

中華英語が少ないということは、中国にはそれを補えるくらいたくさんの単語があるということだ。日本には「television」というものに対して適当な日本語がないからそのまま読んで「テレビ」として定着しているが、中国には「□□」という「television」と似たものがあるからわざわざ英語を借りる必要がないのだ。逆に中国語で表現できないものは、中国古来のものではなく、中国にはそれに相当するものがないということになる。したがって中華英語で表すものを探すことは、もともと中国になかったものを探すということに近くなる。以下が中華英語として使われているものである。文字としては中国語になるが、発音は英語をベースとしたものになっている。

外国語の表現	中国での表現	発音
coffee	咖啡	カーフィェ
pizza	□□	ピサ
espresso	□□□	ノンカーフィェ
Hamburger	□□□	ハンバオバオ
chocolate	巧克力	チョコリー
Macdonald	□□□□	マクゥドナ

外国語の表現、中国の表現とその発音（発音はあくまで目安として端的に表したものです。）

最後に

同じものでも、国によって表現の仕方が違うということは、モノの捉え方が違うということであり、このような違いを知る事こそが異文化理解ではないかと思った。
また今回は言葉を軸にした調査であったが、言葉だけでなく、ジェスチャーやなど日常生活を反映するものに焦点を当て、さらなる調査を続けようと思った。
言語や宗教を軸として現地の方とお話をし、考え方の違いや文化の違いを肌で感じることができ、うわべではなく本当の世界を知るという貴重な異文化体験ができました。次のステップとして、行ったことのない言語、歴史、宗教を軸とした文化圏へ行き、さらに深い言葉と歴史と宗教の関係性を調べ、様々な文化および考え方の違いを肌で感じたいです。
また今回は言葉を軸にした調査であったが、言葉だけでなく、ジェスチャーやなど日常生活を反映するものに焦点を当て、さらなる調査を続けようと思った。
最終的にはこのような自分の体験を様々な形で沢山の人に伝え、考え方や物事の捉え方が違う面白味を知り、外国のことをもっと知りたいと思えるような異文化理解のきっかけを作りたいと思います。

現地の様子を写真とキャプションでまとめました。

セルビアの首都ベオグラードにて。ＮＡＴＯによって爆撃されたビルを訪れました。現在でもガラスが割れ、物が散乱した状態の建物が至る所にあり驚きました。

ブルガリアの首都ソフィアの街並みです。細い道では、石畳の道がたくさんあります。日本ではあまり見ないので、道路を見るだけで異国に来たことを感じさせてくれます。

マケドニアにて。日本人かと尋ねられ、息子さんと写真を撮ってくれと頼まれました。
アジア人が訪れることが珍しいようです。誰もがフレンドリーでウェルカムで心地の良い国でした。